

第一次大極殿院の調査 (平城第551次)

大極殿院は、国家的儀式をおこなった場所として、古代都城の中で最も重要な空間です。第一次大極殿の前面は、広大な礫敷広場となっていました。この広場には、一時的な施設がいくつか存在していたと考えられています。今回の調査は、これらの施設に関して二つの目的を設定しておこないました。一つは、奈良時代前半の^{どうき}幢旗遺構(元日朝賀等の際に立てたとされる旗竿支柱の痕跡)の確認、もう一つは、大極殿前面に存在すると推定されている「井戸」の性格および時期の確認です。

まず幢旗遺構についてですが、今回の調査区の南側でおこなわれた2013年度調査(平城第520次)では、奈良時代後半の幢旗遺構が確認されており(奈文研ニュースNo.53参照)、奈良時代後半に幢旗が立てられていたことは間違いありません。それでは、この幢旗を立てる儀礼は、いつからおこなわれていたのでしょうか。『続日本紀』には、大宝元年(701)の元日朝賀の際に幢旗を立てたという記述があります。したがって、これ以降には幢旗遺構の存在が想定できます。しかし、現在のところ、藤原宮でも平城宮第一次大極殿院でもその痕跡は確認できていません。そこで今回は、第一次大極殿の中軸上に南北18m、東西8mの調査区(東区)を設定して調査をおこないました。

その結果、奈良時代後半の柱穴が2基見つかりましたが、奈良時代前半の遺構は確認できませんでした。この所見から、少なくとも今回の調査区付近には幢旗遺構は存在しないと考えられます。どこか別の場所に立てられていたのでしょうか。

次は井戸についてですが、1971年度調査(平城第72次南)では、第一次大極殿の前面の東側に「井戸」



東区の遺構検出状況(東から。左に柱穴がみえる)

らしき遺構が見つかっています。ここから、大極殿の中軸を挟んで対称の西側にも同様の遺構があると推測されてきました。東側の「井戸」は、平面規模が3.5m×3.1mの隅丸方形で、深さが2.5mあります。井戸枠等は見つかっておらず、造られた時期も定かではありませんでした。そのため、西側でこれを確認するべく、南北16m、東西12mの調査区(西区)を設定して調査をおこないました。

調査の結果、平安時代初頭の東西溝が1条と、奈良時代前半の土坑が見つかりました。この土坑は、平面形が2.7m四方の正方形で、深さは約2mあります。土坑を埋めたあとに奈良時代後半の礫敷がなされており、この土坑が奈良時代前半に設けられたことはほぼ間違いありません。問題は性格です。土坑は、平面正方形で壁は直立しており整然と造られていますが、内部には井戸枠等はありませんでした。また、埋土の一番下からは木簡の削り屑や檜皮が出土しましたが、性格を確定するにはいりませんでした。この状況は先に記した東側の状況に似ています。東西対称の位置にある方形の土坑は、一時的であるにせよ、何らかの構造物の痕跡であることは確かです。今後各地の類例を探りながら、性格を追究していきたいと思います。

(都城発掘調査部 芝 康次郎)



西区中央で見つかった方形の土坑(南西から)